

---

ボエティウスのプラトニズム  
——アリストテレス注解の視点から——

周 藤 多 紀

はじめに

ラテン語圏プラトン主義研究の権威である Stephen Gersh は『中期プラトニズムと新プラトン主義——ラテン語圏の伝統』で、ボエティウスは「主としてプラトン主義者である」と述べている<sup>1)</sup>。

実際これまで、ボエティウスに影響を与えた思想家として、様々なプラトン主義者——アプレイウス、プロティノス、ボルピュリオス、イアンブリコス、プロクロス、アンモニオス——がとりざたされてきた。

しかしながら近年主にボエティウスのアリストテレス注解を研究してきた私の目から見れば、ボエティウスは概してアリストテレスの優れた理解者である。また近年のボエティウス研究の進展によって、先行するプラトン主義者たちのボエティウスへの影響は、過去に言われたほどではないことが明らかになりつつある<sup>2)</sup>。したがって本提題は、ボエティウスがどれほどプラトン主義者ではないかを示すものになるだろう。しかし、ボエティウスが或る意味でプラトン主義者であり、中世におけるプラトン主義の伝統の源泉の一つであることを私は否定するつもりもない。本提題の意図は、ボエティウスがどれほど、そしてどのようなしかたでプラトン主義者であるかを示すことにある。

---

1) Stephen Gersh, *Middle Platonism and Neoplatonism. The Latin Tradition*, vol. 2. Notre Dame UP, 1986, 647.

2) John Magee, "Boethius," in L. Gerson ed. *The Cambridge History of Philosophy in Late Antiquity*, Cambridge UP, vol. 2, 788-812, 及び拙著 *Boethius on Mind, Grammar and Logic: A Study of Boethius' Commentaries on Peri hermeneias*. Brill, 2012 を参照のこと。

## 1. 異なる「プラトン」評価

ポエティウスの著作中最も有名な『哲学の慰め』は、プラトン主義の色彩が濃いことはよく知られている。現代のコメンタリーの多くは、プロティノスやプロクロスの名前をあげながら新プラトン主義の影響を指摘しているが、いわゆる新プラトン主義者の名前は作品中にはまったく見られない。頻繁に持ちだされるのは「プラトン」自身の名である。「わたしたちのプラトンの時代 (nostri Platonis aetas<sup>3)</sup>)」と語る哲学の女神は、プラトンの『ティマイオス』の第一部に基づいた宇宙観を詩で表現し<sup>4)</sup>、「悪人は無力だ」というプラトンの『ゴルギアス』(466-468)での主張を強く支持する<sup>5)</sup>。常に最終的には女神の言うことに従うように見えるポエティウスは、女神が提示したプラトンの想起説<sup>6)</sup>に大いに賛同を示している<sup>7)</sup>。

しかしながら、論理学著作では「プラトン」は肯定的に評価されていない。たとえば、『命題論第二注解』では、「プラトンのイデア論の支持者」が唱えている、「馬 (equus)」という話し言葉は「馬そのもの (equus ipsum)」つまり馬のイデアを表示する (significare) という説は退けられている<sup>8)</sup>。ポエティウスが支持するのは、話し言葉は第一に心の中の概念を、第二に (概念を介して) 外界の事物を表示するというポルピュリオスの見解である<sup>9)</sup>。また、シュリアヌスの解釈を何度か批判しているが<sup>10)</sup>、そのうちの一つで、シュリアヌスは「人間は正しくない (non est homo iustus)」は「人間は誰ひとりとして正しくない (nullus homo est iustus)」と同意であると解釈したと伝えられている。シュリアヌスはプラトン、アリストテレス双方から支持を得ることができる解釈だと考えていたようだが、ポエティウスは、アリストテレスの議論と明らかに矛盾するという理由でこの解釈を退けている<sup>11)</sup>。

さらに『エイサゴゲー第二注解』でも、「類や種といった普遍は物体

3) *Consolatio* I, m. ii.

4) *Consolatio* III, m. ix.

5) *Consolatio* IV, pr. ii.

6) *Consolatio* III, m. xi.

7) *Consolatio* III, pr. xii.

8) *In PH*<sup>2</sup> 26. 27-28.

9) *In PH*<sup>2</sup> 8. 6-7; 24. 12-13.

10) *In PH*<sup>2</sup> 18. 26 sqq.; 87. 30 sqq.; 172. 13 sqq.

11) *In PH*<sup>2</sup> 171. 3-173. 12.

なしに自存する (subsistere)」という「プラトン」の考えは、哲学的な正否はともかく、アリストテレスのカテゴリー論への入門と位置づけられている『エイサゴゲー』の注解書ではふさわしくないとされて退けられている<sup>12)</sup>。ボエティウスが支持するのは、ペリパトス派の注釈家として名高いアレクサンドロス・アフロディシアスの「抽象説」——類や種は個体の内に存在するが、非物体的本性を物体から切り離す心のはたらきによって普遍として理解される——である<sup>13)</sup>。

論理学著作でのボエティウスは、このようにプラトンから距離をとりながら、アリストテレスとプラトンは多くの重大な哲学的問題において一致するだろうという見通しも示している<sup>14)</sup>。プラトンとアリストテレスは合致するという考え方は新プラトン主義の影響下にある注釈家の伝統に広く認められるものであり、ボエティウスもこうした伝統の渦中にあったことは疑いえない。正反対の方向性を持つようにも見えるプラトン哲学とアリストテレス哲学が、どのようなしかたで対立することなく理解できるのかという問題について、ボエティウスはいつかどこかで自分の考え方を述べるつもりでいたのかもしれないが、現存する著作の中には明確な解答は見つからない。本提題は後に、残されたテキストを手がかりに、この問題に対する解答を試みる。

## 2. ボエティウスの著作中での「プラトン主義者」

過去のボエティウス関連の研究は、プラトンとのつながりをボエティウス自身が指摘していない、プラトン主義の影響下にある思想家に注目してきた<sup>15)</sup>。

これらのいわゆる（つまり研究者が現在そう呼ぶという意味で）プラトン主義者のなかには、ボエティウスが著作を通して一度たりとも名前に言及していないもの——アプレイウス、プロクロス、アンモニオス——もいる。アプレイウスには、内容的にボエティウスの『命題論注解』等と重なる部分がある『命題について』という小論がある<sup>16)</sup>。しかし、両者を比較

12) *In Isag.*<sup>2</sup> 167. 12-20.

13) *In Isag.*<sup>2</sup> 164. 4-172. 12.

14) *In PH*<sup>2</sup> 79. 16-80. 6.

15) ボエティウスの著作の中で「ストア派 (Stoici)」「ペリパトス派 (Peripatetici)」というタームはしばしば見られるが、「プラトン派 (Platonici)」というタームは稀にしか見られない。

16) 水落健治「アプレイウスにおけるアリストテレス論理学とストア論理学」[翻訳

検討すると数多くの顕著な相違点があって、ポエティウスがアプレイウスの影響下で『命題論注解』を書いたとは考えにくい。アプレイウスの著作にストア派の影響が濃く見られるのに対し、ポエティウスの定言命題についての説明はよりペリパトス派のモデルに近い。プロクロスの意味論は、ポエティウスが退けた、名前が直接イデアを表示すると主張するプラトン主義者の考え方に近い<sup>17)</sup>。『命題論注解』で、アンモニオスがbe動詞は「ト・オン（存在するもの）」という名詞から派生するという、新プラトン主義の流出論を背景に持つように見える解釈を提示しているのに対し、ポエティウスはそのような派生関係を持ち込まない<sup>18)</sup>。要するに、少なくとも論理学のいくつかの重要な問題について、ポエティウスとアプレイウス、プロクロス、アンモニオスとの隔たりは大きい。確かにポエティウスのテキストの中には、過去の研究が指摘したように、これらの先行する思想家の著作に類似した表現や議論がある。しかし、類似した表現や議論は、ポエティウスがこれらの思想家の著作を読み、影響を受けたことを証明しはしない。類似点は、両者が読んだ著作——例えばポエティウスとアンモニオスはどちらも、ポルピュリオスの失われた『命題論注解』を読んだと想定される——に由来する可能性が十分にある。

さらに、たとえ言及されていても、言及回数や内容から著作を直接読んだかどうか定かではないことも多い。プロティノスはただ一度「最も重要な哲学者」という呼称と共に言及されているが<sup>19)</sup>、ポエティウスが『エンネアデス』を読んだ痕跡は薄い<sup>20)</sup>。イアンブリコスの影響については後に論じることにするが、計三度の言及はいずれもイアンブリコスの思想に深く立ち入ったものではない<sup>21)</sup>。前述のように、何度か解釈が紹介されているシュリアノスについても、情報源はシュリアノス以降に書かれたギリシア注解であった可能性がおおいにある。

確かなことが言いにくい、いわゆるプラトニストたちのポエティウスへの影響だが、ポルピュリオスの影響ははっきりしている。ポエティウスはポルピュリオスを「最大の権威」「最も優れた注解家」と呼び<sup>22)</sup>、注解の

および解説：命題について』『新プラトン主義研究』5号（2006）49-103頁。

17) *In Parmenidem* 850-852.

18) 詳論は前掲拙著 Chapter 6 を参照。

19) *De divisione* 4.3-7 = 876d.

20) John Magee, *Boethii De divisione liber*, Brill, 1998, 59.

21) *In Cat.* 162a; 224d; 225d.

22) *De syllogismo categorico* 54. 16-17; *In PH*<sup>I</sup> 132. 5-6.

数々の場面で、ポルピュリオスの解釈を採ったことを明言している。ジェームズ・シールが、ボエティウスはポルピュリオスの著作を直接読んだわけではなく、古注内に書き込まれたポルピュリオスの著作からの引用を読んだのだという説を唱えたことがあったが<sup>23)</sup>、言及回数と内容から考えると、ただ単に間接的に読んだとは考えにくい。

アンドリュー・スミスが編纂したポルピュリオス断片集には、ボエティウスの著作から 27 の断片と三つの証言が収集されている<sup>24)</sup>。それらはすべて、「ポルピュリオスがかくかくしかじか言った」といったような文を(前後に)含む箇所である。しかし、ボエティウスが、そうと言わずにポルピュリオスの見解を踏襲している箇所も数多くあると推測される。『命題論注解』をはじめとしたポルピュリオスの多くの論理学著作が失われた現在、ボエティウスの論理学著作は「ポルピュリオ斯的意味論 (Porphyrian semantics)」を再構成するための貴重な資料でもある。

### 3. プラトンとアリストテレスの合致 (1) ——ポルピュリオスの伝統

さて、ボエティウスがポルピュリオスの影響を大きく受けていることを念頭におきつつ、プラトンがアリストテレスとどのような仕方で合致すると彼が考えていたかという問題を考察してみたい。手がかりとして、典型的にプラトン主義を示すものとされる「分有 (participatio)」「分有する (participare)」というタームに着目する。

「分有」「分有する」というタームが、トマス・アクィナスも注解をものした通称『デ・ヘブドマディブス』(正式な題名は『もろもろの実体はその本質において善きものであるが、しかし実体的な善であるわけではないのはいったいかにしてであるか、についてローマ教会の助祭ヨハネスに宛てた書』)において核心的な役割を果たしていることは、よく知られている。以下に、その中から代表的な箇所を引用する。

存在するものは或るものを分有できるが、存在そのものはいかなる仕方で或るものを分有しない。というのも、或るものがすでに存在するときに分有が生じるからである。しかるに、或るものが存在するの

23) James Shiel, "Boethius' Commentaries on Aristotle," in *Aristotle Transformed*, ed. R. Sorabji, Ithaca: Cornell UP, 1990, 349-72. 基本的な主張は、同題の論文が最初に出版された 1958 年から変わっていない。

24) Andrew Smith, ed. *Porphyrii philosophi fragmenta*, Teubner, 1993.

は、存在をすでに受けとっているからである<sup>25)</sup>。

すべて存在を分有するものは、存在するためにそうするのであるが、或るものであるためには別のものを分有する。したがって、存在するものは存在するために存在を分有し、何であれ別のものを分有するために存在しているのである<sup>26)</sup>。

これらの箇所では、分有において、分有するものと分有されるもの（存在・存在とは別のもの）のどちらが先在するのかが問題となっている。

存在論的な「分有」の用法は『哲学の慰め』のいくつかの箇所でも見られる。

それゆえ、幸福な人はすべて神です。もちろん、神は本性上一つです。しかし、神を分有することによって神となる人が幾人かいても、そのことにはさしつかえないのです<sup>27)</sup>。

ところで、あなたは善であるものはすべて、善の分有によって善いということをお認めですか、それとも認めませんか<sup>28)</sup>。

これらの箇所では、分有されるもの（神・善）は分有するもの（至福者・善きもの）の原因であると表明されている。

それに対して、論理学著作では「分有」「分有する」という表現が使われることは非常に稀である。また使用されていても、存在論的なニュアンスは非常に薄いことが多い。

肯定も否定も同等に言表を分有する<sup>29)</sup>。

人間は固有には類である動物を分有する<sup>30)</sup>。

---

25) *Quomodo*, axiom III.

26) *Quomodo*, axiom VI.

27) *Consolatio* III, pr. x.

28) *Consolatio* III, pr. xi.

29) *In PH*<sup>2</sup> 99. 7-8.

ボルピュリオスは別の解釈を提出した。それは次のようなものである。「ある (est)」という言葉はそれ自体で実体を示すものではなく、常にある種の接続詞なのである。もしそれだけで適用されたら、存在する事物と結びつける接続詞である。そうでなければ、別の事物と結びつける、「分有」にそくした接続詞である。……もし私が「ソクラテスは哲学者である」と言うなら、ソクラテスは哲学を分有すると言わんとしているのである。この場合、私はソクラテスを哲学に結びつけているのである<sup>31)</sup>。

これらの「分有」「分有する」の用例においては、分有されるものと分有するもののどちらが先に存在するかとか、どちらが原因でどちらが結果なのかを問うような「分有の形而上学」の痕跡は薄い。最後の例では「参加」とでも訳した方がふさわしいだろう。「ソクラテスは哲学者である」という文中の「ある」は「分有にそくした接続詞」であるが、それはソクラテスが哲学という活動に「参加」していることを示すからである。このようにボエティウスは概して論理学著作において形而上学的議論を避ける、言いかえれば論理学と形而上学の領域をはっきりと区別する傾向にある。

しかし論理学著作のいくつかの箇所では、論理学的考察の背後に分有の形而上学があることが微かに透けて見える。その最も顕著な箇所が「派生語」の解説の場面である。アリストテレスの『カテゴリー論』(1a12)での「グラマティケー文法の知識がある人」は「グラマティケー文法」の「パロニユマ派生語」だという言葉を受けて、ボエティウスは次のように言う。

派生的な言葉が成立するには三つの要素が必要である。一つ目には事物を分有すること、二つ目には名詞を分有すること、三つには名詞のある種の変形があることである。例えばもし或る人が、「フォルティテュード勇氣」から派生した「フォルティス勇氣ある人」という言葉で呼ばれるなら、その勇氣ある人が分有するような或る種の勇氣があり、その人は名詞の分有も持つ。というも「フォルティス勇氣ある人」と言われているからである。……事物を分有しないものであったら、名詞の分有もありえない<sup>32)</sup>。

30) *In Cat.* 271d.

31) *In PH*<sup>2</sup> 77. 13-23.

32) *In Cat.* 168a. 現存するボルピュリオスの『カテゴリー論注解』(*In Cat.* 69. 33-70. 6)でも同様の条件が提示されている。

或る言葉が別の言葉の部分で「分有」する——例えば「フォルティス」は「フォルティチュード」の部分「フォルティ」を分有している——とき、事物の次元においても「分有」関係——例えば勇氣ある人は、或る種の仕方でも勇氣を分有する——が前提としてあることが示唆されている。

そして条件文の考察では、次のような発言をしている。

「人間であるなら動物である」と言うとき、人間であるから動物であるわけではない。おそらく類から原理が導かれ、本質の原因はむしろ普遍的なものからとられるのであって、動物であるがゆえに人間であるのである。なぜなら、種の原因は類にあるからである<sup>33)</sup>。

「人間」の概念が「理性的動物」というように分析可能であるから、「人間であるなら動物である」が真なる条件文として成立するとポエティウスは考えない。むしろ動物という類に属するものでなければ人間という種に属するものではありえないのだから、動物が人間の原因であると考ええる。「種 y は類 x を分有する」と述べる時、ポエティウスはこうした因果関係 (x は y の原因である) を念頭に置いているのである。

派生語や条件文の考察から観てとられるように、ポエティウスにとって言葉を分析することは、言葉そのもの、あるいは言葉が直接に表示する概念そのものの分析に留まらず、概念を介して言葉が表示する実在のあり方の分析へとつながるものであった。したがって、アリストテレス的な論理学はプラトンの「分有」の形而上学との連続性を持ちうる。原理的には後者がより先なのだが、我々にとっては前者がより先に知られるのであって、前者は後者に至るステップ・道具として使用されうる。ポエティウスはこうしたプラトンとアリストテレスに対する見方を、彼が最大の権威とみなしたポルピュリオスから学んだと考えられる<sup>34)</sup>。

#### 4. プラトンとアリストテレスの合致 (2) ——イアンブリコス伝統

ではポエティウスは、ポルピュリオスの見解、ポルピュリオスのプラト

33) *De hypotheticis syllogismis*. 220. 63-67 = 835c.

34) ポルピュリオスにかんしては George Karamanolis, *Plato and Aristotle in Agreement?: Platonists on Aristotle from Antiochus to Porphyry*. Cambridge UP, 2006, 329-30 が、ポエティウスにかんしては Magee 前掲論文, 803 が類似した解釈を提示している。



ン主義をそのまま継承したにすぎないのだろうか。じっさいポエティウスはポルピュリオスの著作を翻訳・紹介したにすぎないという見解が提出されたこともある<sup>35)</sup>。しかし、ポエティウスは『命題論第二注解』の中で一箇所ではあるが、ポルピュリオスに帰せられている見解を自覚的に拒絶している<sup>36)</sup>。「昼なら、光がある」という条件文をポルピュリオスは昼であるという事実と光があるという二つの事実を示す文と理解したのに対して、ポエティウスは「昼であるなら光がある」は一つの事実、因果関係を示す文であると反論する。ここでのポエティウスの「一」への執着は、『哲学の慰め』での神と神の直観・摂理の単一性の議論<sup>37)</sup>につながるものかもしれない。

さらに『カテゴリー論注解』の冒頭では、この注解での解説はポルピュリオスに従った簡潔で明晰なものであるが、稿を改めてピュタゴラス派流の完全な学説を提示すると予告している<sup>38)</sup>。現存するポエティウスの『カテゴリー論注解』は一つであるが、この発言から、書かれなかった、あるいは書かれたものの失われた『カテゴリー論注解』があったと想定されている<sup>39)</sup>。そしてポエティウスは、第二の『カテゴリー論注解』での高度な解釈を、ピュタゴラス派の学説に通じていたイアンプリコスに依拠して展開しようとしていたように見えるのである<sup>40)</sup>。ピュタゴラス派にそくした、アリストテレスのカテゴリー解釈が正当化されると考えていたのは、ピュタゴラス主義者のアルキュタスが、アリストテレス以前に十のカテゴリーを発見したと信じられていたからである<sup>41)</sup>。

ピュタゴラス主義の影響は、ポエティウスの音楽論及び数学論において最も顕著に認められるが、ピュタゴラス派流のカテゴリー解釈の可能性は数学論（『算術教程』）でも示唆されている。『カテゴリー論注解』と同様

35) Joseph Bidez, "Boèce et Porphyre," *Revue belge de philologie et d'histoire* 2 (1923): 189-201.

36) *In PH<sup>2</sup>* 109. 28-110. 14.

37) *Consolatio* IV and V.

38) *In Cat.* 160b.

39) Pierre Hadot, "Un fragment du commentaire perdu de Boèce sur les *Catégories* d'Aristote dans le *codex Bernensis* 363," *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Âge* 26: 11-27 (1959) はその一部を発見したと主張した。

40) *In Cat.* 162a.

41) 念頭におかれていたのは、現在では偽アルキュタスと呼ばれるアリストテレス以後の人物の著作である。Ps-Archytas, *Über die Kategorien: Texte zur griechischen Aristoteles-Exegese*, ed. and trs. T. A. Szlezák, Gruyter, 1972.

にアルキュタスの名前が挙げられ、「最も熱心なピュタゴラスの徒」と呼ばれているプラトンは、アルキュタスの分類に従ったと述べられている<sup>42)</sup>。

『哲学の慰め』の中では、まず、キリスト教の教えとしてではなくて「ピュタゴラス主義」の言葉として「神に従え」が紹介されている<sup>43)</sup>。さらに、数学的な秩序にそくして宇宙が創造されているという考え方が韻文で表現されている。

この男〔ポエティウス〕はかつて大空を自由に疾風のように駆けめぐっては、薔薇色に輝く太陽の光を眺め、澄み渡った月天に見入り、そうした満天の星がさまざまな円を描いてさすらいつつ回帰することを誇らしげに数によって把握した<sup>44)</sup>。

あなたは〔天と地の創造者〕は元素を数によって結び、熱いものには冷たいものを湿ったものには乾いたものを配合し、より純粋な火が飛んで逃げたり、重さのために土が沈みこんだりしないようにする<sup>45)</sup>。

イアンブリコス、古代末期に登場したプラトン主義をピュタゴラス主義と同一視する見方を押しすすめ、あらゆる学知を数学的に記述しようとしたと考えられている<sup>46)</sup>。こうした数学化の志向はポルピュリオスの伝統には見られないものである。ポルピュリオスもピュタゴラス派の影響にあるが、神的直観に上昇する手段として、数学よりもむしろ菜食主義など倫理的な側面に関心を抱いていた<sup>47)</sup>。降神術（テウルギア）に理論的な基盤を与えようとしたり、第一原理と知性界の間に中間的な段階を挿入して原理的存在を重層化したりといったイアンブリコスの伝統の他の特質は受け入れなかったポエティウスであるが、数学的なカテゴリー解釈を支持することで、ポルピュリオスの伝統を越え、イアンブリコスの伝統に従ったと考えられる。

42) *De arithmetica* II, XLI.

43) *Consolatio* I, pr. iv.

44) *Consolatio* I, m. ii. *The Consolation of Philosophy*, trs. S. J. Tester, Loeb Classical Library, 1973 の注 (pp. 136-137) は「数学的天文学」との関係を指摘している。

45) *Consolatio* III, m. ix.

46) Dominic O'Meara, *Pythagoras Revived: Mathematics and Philosophy in Late Antiquity*. Oxford UP, 1989.

47) O'Meara 前掲書, 29-30.

## 結 語

もしポルピュリオス以降ピロポヌスまでの注釈家がプラトン主義者の頭、アリストテレス主義者の胴体、ストア派の尻尾を持つキメラに喩えられるとするならば<sup>48)</sup>、アリストテレス注釈家としてのボエティウスは、比較的小さな頭を持つキメラと言うべきであろう。イアンブリコス自身、そしてイアンブリコスの強い影響下にあるシュリアヌスやプロクロスに比べればもちろん、ポルピュリオス<sup>49)</sup>やアンモニオスに比しても、ボエティウスのアリストテレス注解中のプラトン主義的要素は少ない。というのも、ボエティウスは、ポルピュリオス由来のアリストテレスとプラトンの見方にしたがい、論理学著作においてはプラトン主義の影響を極力排除しようとしていたからである。現代の多くの研究者は、論理学著作よりもむしろ『哲学の慰め』や『デ・ヘブドマディプス』を通してボエティウスと出会う。そうすると、ボエティウスというキメラをどうしても正面から見てしまい、頭が最初に目に入ることになる<sup>50)</sup>。しかし本当は、ボエティウスは長い胴体を持つキメラであって、「主としてプラトニスト」というコメントはボエティウスの全貌を捉えたものではない。しかし、イアンブリコスの伝統に従ったボエティウスというキメラの頭の先端部（タテガミあるいは髭？）が、果たして胴体とつながっているかははなはだ疑問である。現代のアリストテレス研究者は間違えなく「否」と判定するであろう。

本稿は平成 23 年度科学研究費補助金（若手研究 B）による成果の一部である。

---

48) Sten Ebbesen, "Philoponus, 'Alexander' and the Origin of Medieval Logic: A Reconstruction," in *Aristotle Transformed*, 1990, 459 の表現を借りた。

49) Boethius, *In Cat.* 216 c と Porphyry, *In Cat.* 111. 9-10 を, Boethius, *In Cat.* 233b-d と Porphyry, *In Cat.* 120. 33-121. 3 を比較対照。

50) 様々なボエティウスの著作を整合的に読むことができるか——『哲学の慰め』や『デ・ヘブドマディプス』を書いたボエティウスは、アリストテレス注解を書いたボエティウス・キメラとは別物ではないかという——問題は置く。たとえ別物であっても、前者の印象は後者の解釈に投影されやすい。